

大半で、したがって名古屋で高温が観測されたのも大部分がこの時期である。このほか東京とおなじように台風を伴った東谷の気圧場で 37°C 以上の高温があらわれる時があるが、この場合は1回だけで終り持続はしない。

終りにこの調査でいろいろとご助力していただいた名古屋地方気象台の服部満夫氏、加藤久雄氏及び本多進氏

に厚く御礼を申し上げる。

#### 参 考 文 献

窪田健次 (1952): 名古屋の高温について, 東海地方研究会誌, 第6巻第2号

### Sir George Simpson 逝く

雷雲内の電気分布とその発生の問題の研究者として、また英国気象局長として、わが国の気象学界にも親しかった G.C. Simpson は1965年1月1日に86才で逝去された。

George Clarke Simpson は1878年9月2日にダービーで生れた。16才の時に学校をやめて家業の手伝いをさせられたが、余暇に Tyndall の「光学」やその他の科学書に熱中して読みふけているのを見て、父親は科学の勉強をさせた方がよいと考え、アンチェスターのオーウェンズ・カレッジに入れた。そこで Arthur Schuster や Horace Lamb の教えを受けた。そこを卒業した後 Schuster の言葉に従ってゲッチンゲンに行き、E. Wiechert の下で大気電気ことに地球の負電荷保持の問題について勉強した。それから Lapland の Karasjok (ノルウェー北部) に行つて、高緯度における大気電気諸要素の実測と研究をしたが、これはその専門の人たちからは注目される業績であった。

1903年に Karasjok から帰つた後、短期間ではあったが英本国気象局に勤め、ビューホート風級と相当風速について調査をした。1906年からはインド気象局に入った。ここで時間のゆるす限り大気電気の研究に従事した。このあと30年以上にわたつて、C.T.R. Wilson との有名な論争を含む、雷雲の帯電、雷雲中の電荷分布、水滴の分裂に伴う電気現象の研究が続くのである。

1909年には Scott の南極探検隊に加わつた。インド側の要請で、最初の予定より1年早く1912年3月に南極を引き上げて、またインド気象局に戻つたが、今度は忙

しい行政的事務が待っていた。それでも南極における研究結果を記した、氷点下かなり低い温度の高層大気中の過冷却水滴の存在、南西季節風の構造、半日周期気圧波等価値の高い論文を発表した。

1920年には英国に戻り、Sir Napier Shaw の後任として気象局長になり、1938年までその職にあった。この時期は民間航空が発展して、気象業務にも新しい国際協力の面が加わり、また第2次世界大戦の勃発に先立つ変動の多い時であつた。この時にも彼はなお研究を捨てずに、大気放射と熱平衡の問題を論じ、雷雲の電氣的構造を観測するための探測気球を1934—36年と1937—39年とに飛揚し、また気候変動、氷河時代の気候等に関する有名な論文を出している。

彼は1938年9月にその職を Sir Nelson Johnson に譲つたが、1939年に大戦が勃発すると、自ら申出てキュー観測所の所長となり、E.G. Dymond とともにフィンランドやフランスのものとは独立に英国型ラジオゾンデを確立する等観測技術の水準の向上につとめ、また大気電位傾度、雨の電気、雨の強さの1分毎の記録をとることを行なつた。彼の大きい論文の最後のものは1957年に出版した“Further Studies in World Climates”である。

1915年には Fellow of the Royal Society (F.R.S.) に選ばれ、1930年にはサイモンズ金牌を受け、1935年には Knight Commander of the Bath (K.C.B.) に指名されている。不幸にも1930年ごろから耳が遠くなり、これには難儀をしていたようである。(畠山久尚)